



能譜七部集

炭俵

二

5
4406
2



門へ 5
號 4406
卷 2

Handwritten text in a cursive script, likely a form or document, written in dark ink on aged paper. The text is arranged in several vertical columns, starting from the right side of the page and moving towards the left. The characters are somewhat faded and difficult to decipher precisely, but appear to be a mix of kanji and possibly some katakana or hiragana. There are several red circular seals or stamps interspersed within the text, particularly on the left side of the page.

昭和九年
九月二日
晴末



山陰信三

は集の撰りら孤屋形坡の牛らハ草ノ一色葎の新



十好有りま乃美字の群風をそけいあつて事也
ゆり冬とのくほまさをあつてかここ子らるへけ
火極ふりー炭をねこす巻をねれよとけ
宋人のも毫^{カニ}さすくいつらまもさしんときあ著
一糖のさやまのさと堅よとて様ふまて

金屋のね乃古はよまをねれいなりすらひん
あつらるり身入片くもつらうのめまのめ
まの足よ沈のまりのまらるるやれまひえはの
日ひつてあつたの秋の月よりかかあまの
やつれり篇りりし竟よけつらのこまをり
わつとらんをひくみまの有色のねをあやま
ねていれまふくわまのまをりまの
郎ととかくはつた詩の義よるまの

誹諧炭俵集上卷

芭蕉

むちうのつと日乃出る山溪うそ

まなくしり雑子乃啼く多は

是嘗情と去の子まきとわなて

上乃るあわしりあうるま乃五

雪乃内はしくとせしる乃生

花越とまはあまのはひりぶ

野坡

全

芭蕉

全

野坡

内乃の葉よりとるくわいれ久し

娘を笑う人しあはぬぬ

あふんうよひおたうしるホソモト細末

こゝろくさるるあゝあゝ六月

強けりたみうそりれおむ向はる

甲しといふおんか袋あゝる

沙舟尾乃お病と押へる

らんによれをうりまらるる名月

野坡

芭蕉

野坡

芭蕉

野坡

芭蕉

野坡

芭蕉

まつしよ糸糸下地 きてしん 海 野坡

家とおもしよし 居合ひとあふ 芭蕉

町流若流と力と 酔て糸乃 野坡

門て押し 海と 生と念 佛 芭蕉

東風と 浪右いふれと 鳴右たけし 全

海と 若とよし 海 野坡

江戸も た右むら 糸亭 芭蕉

と 若し 糸のい新と 野坡

方し 一し 糸 野坡

相も 糸 野坡

門 糸 野坡

り 糸 野坡

七の 糸 野坡

又と 糸 野坡

流 糸 野坡

大なる 糸 野坡

こまの丸も末乃方より空をあげ

野坡

美下り谷はり七事の籠り炊

芭蕉

子よ啼り一重しよ空をり香小

野坡

未の空の音乃花してぬき月

芭蕉

隙へ空を知りせす嫁とてまらぬ

野坡

屏風乃落りしみゆらうらうら

芭蕉

谷川

五三

水

三吟

山嵐雪

雲好き鳥還織々水あけり
 あさみや首り雀結きり
 行るそ若乃小坂若くこまりて
 糸をばきくく小園あお撰満
 ちみくと翔日さる乃空さる存
 又移ちる鳴物もおとにあり

利牛 野坡 山嵐雪 野坡 利牛 野坡

沼澤をちみ流り乃そけん
 ありこちひれを登るるさゆり
 隙うさぎと城を海舟の来流
 とうとうしんも哭るるさむわ
 黒谷乃ありや豊饒の聖後院
 五百のうちを二條に流るる
 細めさ乃のちまの記あるまきり
 人さるとわぬねね思むし

利牛 野坡 山嵐雪 野坡 利牛 野坡 利牛 野坡

難後乃鞠を下せたりと云

野坡

服者中しなる事しをちり月

嵐雪

漸と雨降り也としあまの風

利牛

霧散みくハ又解あり

野坡

名
車より九るしふ龍に雲あり

嵐雪

抱持子乃小原を以て

利牛

とくしと河内乃寄持送也

野坡

心みく海し著るせん多く

嵐雪

壻の基に娘の世とて成りたり

利牛

ことし乃其れを何も嘆りぬ

野坡

魚仙乃海なるをさす

嵐雪

比ふいわい乃小原の事なり

利牛

黍草の始を跡に風吹く

野坡

多懐乃喧嘩乃端よりまむ月

嵐雪

少くさくし紅戸て人なり

利牛

今より座や若くちハほとく

野坡

ウ
まをこころうつしませらるたしむ伝
嵐雪

月くわくとゆふのあけ出し
利牛

鏡倉のほきとせくまうほ
野坡

うーとまきまきあふ引
嵐雪

独あふ母をほくせまの陰
利牛

ちくくむ乃くろふ月乃
野坡

[Faint bleed-through text from the reverse side]

[Faint bleed-through text from the reverse side]

[Faint bleed-through text from the reverse side]

[Faint bleed-through text from the reverse side]

[Faint bleed-through text from the reverse side]

[Faint bleed-through text from the reverse side]

[Faint bleed-through text from the reverse side]

[Faint bleed-through text from the reverse side]

あつ川

あつ川

孤屋

空豆乃茶店に多量の紙

登乃ふ鶏もろゝ流海川

上張を過さぬ信と乃向降と

了つと乃とけり海若家申

ら寝交り誰もおとそぬ方の目

とつわと唄乃とらぬあふとと

小つりしは薪乃下よわつち
 兎乃仕中乃工更は流茶
 妙もよい更くくきくくく
 信都君もととくまの文をや
 月あつお明うは君の啼わ
 家のちやうれとあをを見ん
 能汁わつち者やわとくち
 茶もん更もはくち更あ
 孤屋
 芭蕉
 利牛
 芭蕉
 孤屋
 芭蕉
 利牛
 芭蕉
 孤屋

こ乃まはさうやうまを編りたる
 利牛
 うれし一極を今にゆへし
 袋水
 電乃法以さうしあを懸 月
 孤屋
 ふしん丸をしも乃おもんむら
 芭蕉
 不履なる隙と中乃あふるなり
 袋水
 とうち増をよとふあへり
 利牛
 経中をりりうにあまはらる
 芭蕉
 黒水はきししあひをさるる
 孤屋

黒水はきししあひをさるる
 利牛
 多を送りく抱負 枕 臺
 袋水
 今乃まはさるる乃名屋とあそび
 孤屋
 子貢のよととほあれはる
 芭蕉
 息災りし紐足乃きく乃あはる
 袋水
 懐きなるぬ 七文乃照り
 利牛
 名月をまはるとな草 畑
 芭蕉
 けししりあはるる 孤屋
 孤屋

七上

七上

百韻

利牛

子と裸又たてて進て又若ふ
 山とふららのま白に 咲
 多あふれ珠おる鳥の鳴きして
 と力可ふわむふゆう地の
 半行のふふとの紐たふらうと
 るくう新れりあましく人あう
 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋

雪者乃月千葉ふあけあましく此
 掃と法うう標らあましく
 ち、あふふ中してふわかれらるあましく
 坊とふらあれどやまわにふん
 松城やま川へてつれうう海わ
 吹と肺とつうま園まのあ
 十と三ふ一乃衣あ乃あうらひ
 本堂けらるるまうとらうと
 野坡 利牛 孤屋 野坡 利牛 野坡 孤屋

口乃あさる方をあさるむ竹乃色 孤屋
 其奈 孤屋 けよ口すくく 利牛
 迎の路乃さるる河をゆゆ 野坡
 来らるの柳よさる、月乃魚 孤屋
 生イなるさるに折ゆゆ 利牛
 採乃さるるる柳ゆゆ 野坡
 第 貴乃 房ゆ連さる 孤屋
 此 郭 信 なる乃 人 なるさる 利牛

傳ふこと二口 貴乃い 伝ふ 出 野坡
 伝ふこと 伝ふ なる 伝ふ 孤屋
 ない袖を振てみさるも 柳ゆゆ 利牛
 舞 ね乃 なるも なる 野坡
 伝ふ なる なる なる 孤屋
 出 乃 乃 乃 乃 今日乃 大 早 利牛
 切 焼乃 伝 倒し なる 柳 野坡
 なる 乃 伝 なる なる 孤屋

上
 十四

瘡 日とちぎしうきも終るる 利牛

黄てすけ大方ふ終乃重しき 野坡

つとあひ乃名をいやうに呼まらわ 孤屋

とたわ乃衰きんきき并乃本 利牛

かれん月懐し負来る古極 野坡

すいき乃もやんあまるとつて 孤屋

ふつろりと魚をとりし淨き 利牛

戸てうらみし凡凡乃屋極 野坡

伐通に根と槍乃すこあひて 孤屋

赤い小文を安しき 利牛

浪とくち宿きん男乃帯をい 野坡

師を比血尾乃汎乃室は 孤屋

解梅乃白をい 貴い 利牛

天海甲の如きふ長れり 野坡

度、袖をふくつる、恥乃者 孤屋

む、起りしとあはれ 利牛

大乃あぐくに知の砂乃とて 利牛

何年一を挽しきぬ朽の末 孤屋

あふまはる日心乃あふと馳 野坡

丸のすの海はわがしらふ 利牛

扱舟もさうまきたつてし 孤屋

足るし一葉繁よりほかにあふ 野坡

里静に鳴れ引乃あつてし 利牛

やうらうものを嫁乃標あり 孤屋

ふまにうり朝の志まの枝色着 野坡

うんち果るるハ昔乃 利牛

丁一亭に仙履儀乃口 孤屋

折紙の海に土に 野坡

夕月に響きあふる 利牛

包乙 孤屋

定免を今年 野坡

もと仕 利牛

春之部 後句

立去

芭蕉木ノ葉もや修習者如便

芭蕉

車中もやまのうらみさつれうらわ

渾子

みちのくもふも雲霧の海老

松凡

去也脱ふ母波も藤も海老

去来

刀片に但もつてしし今節のま

正春

いろうしきまを春乃かささる

大坂 酒堂

喰ひや木片乃くをいの標物

笹水

程いまの門流坊主のふ脱ひ

法圃

目下にも中々の行や年は可重

孤屋

初之朝の雲葉もまじつるまじりや

利牛

長柄の親乃あて来りてあまの

野坡

梅

梅一よりしりし草乃しあめいかな

露沾

むめ咲や向所梅本名よきまら

曲終

むめい善の節いよきまらむめい

支考

忘乃しりし

み

年賀

むめいしりしあめ乃しあめいりり

土サ

梅はあそほ長あめいりり

利牛

赤みうきりしあめいりり

添七

みめいしりしあめいりり

野枝

あ梅いりしあめいりり

杉風

あそいしりしあめいりり

あそいしりしあめいりり

三

あそいしりしあめいりり

野波

うちむれしりしあめいりり

仙松

遠方乃之まきしり

勝舟一とつてもわくまき

ま+

大くや謀乃出くま勝内

傍

かひ乃有すまき勝内中多

仙花

浪川乃まきしり

吉岡乃まきしり

利牛

十五りまき勝舟乃古まき

大坂
之石

揚乃まきしり

野坂

おこまき乃まきしり

其石

寫

うまきしり

嵐電

まきしり

其石

うまきしり

桃濤

うゑははや門をたあし 豆鼓 負 野坡
つゝも つかも つかも 入るも 由 利牛

柳

こおろももつうして押し 柳の家 湖春
陸まごり 月乃 奈ひ 民 柳の家 春
わ人 ちちら ちちら ちちら 柳の家 野坡

せきまの乃 乃 乃 乃 乃 柳の家 一風
町 乃 乃 乃 乃 乃 柳の家 利牛
傘 乃 乃 乃 乃 乃 柳の家 芭蕉

橋

おろろ ぬ 羅 乃 乃 乃 乃 乃 孤塵
枝 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 湖
会 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 曲

猿イヌのしるしをみせてはつとて
嵐雪

春のあめはつとて家路乃ち去り
支考

さあけ除きくうはつとて
野坡

春

春のあめはつとてはつとて
春

春のあめはつとてはつとて
春

春のあめはつとてはつとて
春

春のあめはつとてはつとて
芭蕉

春のあめはつとてはつとて
松風

春のあめはつとてはつとて
大野

春のあめはつとてはつとて
去来

春のあめはつとてはつとて
去来

春のあめはつとてはつとて
去来

春のあめはつとてはつとて
去来

春のあめはつとてはつとて
去来

あすこゝとあえんのあつたあつた
 大うれてもあつたあつたあつた
 柳のあつたあつたあつたあつた
 牡丹すゝ人もあつたあつたあつた
 あつたあつたあつたあつたあつた
 あつたあつたあつたあつたあつた
 やあつたあつたあつたあつたあつた
 考つたあつたあつたあつたあつた

新口

新炭

柳枝

牡丹

あつた

あつた

あつた

あつた

誰母もあつたあつたあつたあつた
 山橋お川おおつたあつたあつた
 昆布がーあつたあつたあつたあつた
 おらつたあつたあつたあつたあつた
 折るあつたあつたあつたあつた
 あつたあつたあつたあつたあつた
 食らつたあつたあつたあつたあつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

まのりやけり乃、保也風乃末

保也 孫

まよれよきまよれ乃ま乃風乃

仙華

旅り月し

法、夜、旅、月、は、内、は、ま、ま、り

野坡

此集のまよき字大なる此旅乃旅

月乃のまよに、月乃のまよをみまよし

まよ、まよ、まよ、まよ、まよ、まよ

野坡

旅、まよ、まよ、まよ、まよ、まよ

利牛

旅乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

利牛

旅、まよ、まよ、まよ、まよ、まよ

卯、まよ、まよ、まよ、まよ、まよ

芭蕉

う、まよ、まよ、まよ、まよ、まよ

去来

旅、まよ、まよ、まよ、まよ、まよ

う、まよ、まよ、まよ、まよ、まよ

詩

卯さるまゝに和ありし物ありしなり

ま考

掉乃被えやう海へ下りぬ

湖春

菟家祇池より甘しある心なり

素奉

いふくすや作らるる物に老を鳴

芭蕉

郭云

波まむやう階にねる物しん

柳舞

ほしきれ一二る物のあやみ

其角

初燈を月もあはれんほし

嵐雪

挑灯のやに冷たしほし

杉風

まゝなれしあはれもやほし

芭蕉

まゝ中まてあはれなり

素龍

時を啼りし風がふりたる
子規歌乃出されぬ捨る外
野坡

麦

持ちし麦穂いれしや化どり
麦乃穂と生けりくもや能は山
美法名甲持也迄き管とよ
新口
千川
許六

刈とみし麦乃白えや宿名内
利手

美物也出ぬれも程麦乃中
野坡

浦島也ゆくりも堪乃こもさし
盛水

まじりて 浮洲なる 乃 けりて

去来

夕まみあふまき石に乃 けりて

野坡

こゝ月も 隠るも せむしき

素堂

そら

栲や 定家れ せんあわと

栲風

五葉中 ちや 破草ま

五葉

世乃中 ちや 身負 富乃

里

あしあし ころして ねたる 草も ぼけ

嵐雪

あまの ちや ちや

やまの ちや ちや 甲う

詩云

あまの ちや ちや ちや

智月

とへん ちや 人も ちや ちや

山根

あまの ちや ちや ちや

山根

あまの ちや ちや ちや

山根

あまの ちや ちや ちや

山根

山根

ついでに燦もうららつてわつた外 楚丹

さうらうら 喉うらうら 木のうら 残香

猪乃 牙にり 帯にり 菊子 有 乃有

周を 交 伝 町乃 ありつて 風 之風

けい 之 ぶら 鈴 鈴 鈴 拙也 中の家 祐甫

一 枝 ちり 寸 け な 文 竹 文 竹 文 竹 仙花

竹 文 竹 文 竹 文 竹 文 竹 文 竹 嵐雪

竹 文 竹 文 竹 文 竹 文 竹 文 竹

まゝんまゝ人 僕う 何をたし ちりうを

かゝ 柳の ありて 流せし むきうに

あゝ 柳に、それを も ちりし あゝう

あゝ 柳の なりし 名 ありし ありし

あゝ 柳の なりし 名 ありし ありし

あゝ 柳の なりし 名 ありし ありし

あゝ 柳の なりし 名 ありし ありし

あゝ 柳の なりし 名 ありし ありし

行 中を ねて ありし ありし 野坡

1. 10. 1874

Aug. 11. 1874

The first thing I did was to
 go down to the river and
 see what was going on
 there. I found that the
 water was very low and
 the mud was very hard.
 I went down to the
 mill and saw that the
 machinery was all right.
 I then went to the
 mill and saw that the
 machinery was all right.
 I then went to the
 mill and saw that the
 machinery was all right.



The first thing I did was to
 go down to the river and
 see what was going on
 there. I found that the
 water was very low and
 the mud was very hard.
 I went down to the
 mill and saw that the
 machinery was all right.
 I then went to the
 mill and saw that the
 machinery was all right.

1. 10. 1874

The first thing I did was to
 go down to the river and
 see what was going on
 there. I found that the
 water was very low and
 the mud was very hard.
 I went down to the
 mill and saw that the
 machinery was all right.
 I then went to the
 mill and saw that the
 machinery was all right.

詠諧炭俵下巻

梅之部

秋のつれいつゆきのやう
月を教し時俵のなまを
こころ

名月

名月	也	見	つ	も	み	あ	お	て	と	湖春
名月	也	撮	取	よ	ハ	リ	春	の	處	去来
家	堂	こ	こ	こ	こ	見	知	る	月	花
										荷今

名月	也	流	る	記	す	蓮	の	花	酒堂	
名月	也	野	花	揚	り	江	の	月	里東	
名月	也	舟	の	ら	く	出	よ	る	月	利午
名月	也	草	を	も	と	し	り	の	月	長角
名月	也	舟	の	仲	秋	の	月	と	み	み
名月	也	望	幸	不	盡	の	花	時	と	と
名月	也	こ	み	ゆ	ら	と	し	り	町	去来

セタ

毎のくふ花をこやにうらむ

其角

早人をよめしきおわかちの縁

孤屋

と文をかりつるうらむ

嵐書

壺を果る

あはれみくしうらむうらむ

海堂

砂くさほとよハ碎てるの月

名無し

星の月をこらむ

北政

朝衣

明園

朝のやまの泡きつる

芭蕉

あはれや日帰あてり

利合

あはれをこらむ

妙春

秋虫

手ぐれとあうはししうきうき

春月

細り人のとくれやまじく

大叶

端唄りくしてさきもあうこま

あぢ

こころきやあきくさやうのし

孤所

麻

お原の馬しをえうれあふま

車

原のあむ沢や磯の狭恒れ

あぢ

色に染やうりりりる

あぢ

草葉

まほの 草葉の 花や ちよよの 花の 赤

桃流

ふすきと ちよよの 花や ちよよの 花の 赤

那香

片雲の 花や 柳の 花の 赤

桂植

草の 花や 花の 花の 赤

むら

ちよよの 花の 赤

草の 花や 花の 花の 赤

ま

草の 花や 花の 花の 赤

草の 花や 花の 花の 赤

其

園

草の 花や 花の 花の 赤

桃

草の 花や 花の 花の 赤

桃

石のつらきまはらふらたか
うとあやうくみんをもたぬ
あまのうらみハハれしあま
たうらうの葉のまはらふ
うらみしんは様のまはらふ
みんをまはらふまはらふ
あまのうらみまはらふ
うらみまはらふまはらふ
の頂上とまはらふ
うらみのまはらふ
あまのうらみまはらふ

石のつらきまはらふらたか
うとあやうくみんをもたぬ
あまのうらみハハれしあま
たうらうの葉のまはらふ
うらみしんは様のまはらふ
みんをまはらふまはらふ
あまのうらみまはらふ
うらみまはらふまはらふ
の頂上とまはらふ
うらみのまはらふ
あまのうらみまはらふ

石のつらきまはらふらたか
うとあやうくみんをもたぬ
あまのうらみハハれしあま
たうらうの葉のまはらふ
うらみしんは様のまはらふ
みんをまはらふまはらふ
あまのうらみまはらふ
うらみまはらふまはらふ
の頂上とまはらふ
うらみのまはらふ
あまのうらみまはらふ


~~~~~

おぼろげなうめや秋のこころも  
水田石の下や暮らるの月の光  
碇いらいさき海舟の舟りこ  
結のくれりよ〜〜〜  
草のあや黄葉も思はせ〜  
行々

夕空うけりハ秋〜  
〜  
秋の風〜  
秋の葉やあま〜  
危丁の片砂〜  
其角



冬之郡

初冬

風やゆよさしきぬのされ

其角

市中也木の葉も落すしり流

柳原

冬休の夜よと知ると片ら外

芭蕉

松木や流張よりそ冬うま

五深

此の景のされしりまや小ねる

柳原

刈蓄まのねのされしりすし流

柳原

風のされしりまや小ねる

柳原

ゆもれや指のしもさ

柳原

田也畛志けりそ指の

八景

ゆまひるしり流

よ枕のねもまやけり流

柳原

冬月よされのされしりまや小ねる

柳原



時辰

昔の松の根つらうしう。沙みぬ

荊口

思ふにわ 沖の河ぬのわらうら

大十

きききき

つうきききききき

かゝぬも今らハかゝぬもききの

竹炭

をゆらうわらうらうらうらうら

詩云

新木のころ

小松風まらめ 向を 枕やぬ

み岐

大根引

強と重し 小松と重しや 大根引

芭蕉

所 ちよこをすれん ちよこをすれん

歩所

柿 子 ぎきき 子 かの

河老



たむさ とのたむさ

人ありのたむさをふるくまはれ

せせ

ふひを先給ひよさうさふ

示給

ききやうあゆもふくきさふ

利牛

まのともきんてきしきの月  
あなぬまうらよしきの月

初月

里東

あのとらそふのあま

あまのこ  
あまのこ  
あまのこ



雷

とつちよとちうもあつとあつと 非位

非位のえちやとよの鼻とら 非申

とつちや海のあはれあつと 雲と

雲のりくを偽し 雲 勢 偽し

雲のりくを偽し 雲 勢 偽し

そのおんくさしん

雲のりくを偽し 雲 勢 偽し

雲のりくを偽し 雲 勢 偽し

雲のりくを偽し 雲 勢 偽し

雲のりくを偽し 雲 勢 偽し

雲のりくを偽し 雲 勢 偽し

雲のりくを偽し 雲 勢 偽し



題不知

かろしとの物くお色根那

聖人  
品丸

とと兼や物縁のしる 白の信

巻蓋

後門の事そ世みりすすお外

信一云

水木境のらるぬととよかす

然月

やうものそんきとんや夜の名

と色

情めちやあつうさ方の五古又

度中やとく火能のあつたあ

清と化

信はえして所神一

あつたあ

全







老其...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...

...  
...  
...



訓讀秋之部

其

秋のらと雁上の夜より新丸より

ふられて一羽ぬわたりぬ

多勢又日傭掛る月夜

月のほろし四麻の門

神又うまの夕御と暮さるる

つとむるよハぬるころそ

孤

全

其

全

孤

下京ハ宇凡の妻舟よりつれ

帰るの夏より秋の暮

き原のあまより

と吹くより

甲の畔より

と暮るの

河原の

新し秋より

全

其

孤

其

孤

其

孤

其

其



終 羅 一 経 の さ り ね ば ら ぬ ぐ  
 序 の 下 へ 葉 さ じ ち ち ち  
 考 の 物 は 桂 の 糸 ち ち ち  
 夢 一 の さ り の さ り ち ち ち  
 り ち ち ち ち ち ち ち ち  
 さ の 結 の さ り ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち

ち の さ り ね ば ら ぬ ぐ  
 夢 一 の さ り の さ り ち ち ち  
 り ち ち ち ち ち ち ち ち  
 さ の 結 の さ り ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち







八世氏母り

抄部

るるり拾いあつてし事らるる

えいしものさうよれむ風 抄部

入目とおはふとのりとすりゆえ 利年

屏の外まて物めらるる 抄部

初まわらふあつてぬんてさう 抄部

つよゆりしるものさうや 利年

此のまをうらふんかまうしる 抄部

ゆゑなれと長久をさうとぬ 抄部

まわらふ者と書しはねらよりし 利年

いらわさういしものさうら 抄部

ふらふらふらふらふらふらふら 抄部

ふらふらふらふらふらふらふら 利年

ふらふらふらふらふらふらふら 抄部

ふらふらふらふらふらふらふら 抄部



けふのす念仏さくらからさきの  
 野よりさくらさきさきさき  
 人の心負かえぬ楽なまあさ  
 さえやぶさし心りまのま  
 下か早の様さち柳ハさあさ  
 むらみのおらさねさきさ  
 實色ささきさきさきさき  
 さくらさきさきさきさき

新牛  
 新牛  
 新牛  
 新牛  
 新牛  
 新牛  
 新牛  
 新牛

せふの葉をききききき  
 杉のまあさきさきさき  
 けふの若のさきさきさき  
 さくらさきさきさきさき  
 さくらさきさきさきさき  
 さくらさきさきさきさき  
 さくらさきさきさきさき  
 さくらさきさきさきさき  
 さくらさきさきさきさき

新牛  
 新牛  
 新牛  
 新牛  
 新牛  
 新牛  
 新牛  
 新牛

新牛

新牛



名

焼おろし 紅合 くる 家 回 終

初夜

ほろと 澄ん へ 今も ちよく ちよ

初年

おろし ちよと へ ちよと ちよと ちよと

初夜

先 沖 ちよと ちよと ちよと ちよと

初夜

ゆへ ちよと ちよと ちよと ちよと

初年

ちよと ちよと ちよと ちよと

初夜

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*







緋裳の七つはるりとるつれり  
 埴ノ門あるあや石元  
 比鳩の麻冠とよと摺月と糸  
 砂よ 暁のうつるまき 草  
 新島ノの巻もはらつくまのよ  
 吹とらんしるまきわよ 女  
 川 新の節一のふをまよふ  
 平地のきめりうまきま 道

新平  
 孤元  
 道直  
 草  
 新平  
 草直  
 草直

干ぬと日向のまへらせり  
 埴あし 野の巻ふとく 草  
 巻月よほせとまき 道直  
 又あはるまよむま 草直  
 ぞこらと入海ものまうのふ  
 草よのさのむねのねさき  
 中うらと信守人の信りやわ  
 翠をこしとらまきまら日

新平  
 孤元  
 草直  
 草直  
 草直  
 草直  
 草直  
 草直



ウ

風やこし秋の野の庵より

行年

経のつむぎの糸をくぐりぬ

孤屋

ちりほくと羊の掃塔のり庵

芭蕉

月影まらりのつむぎのあらとや

半夜

こもりの草のなか中一草

孤屋

鶯のちらりをくらぬきぬ

行年

芭蕉

野波

孤屋

行年

各九句



松風

平野の松風は口みきこむるごとし  
 日のあふよへのあふくをらすし  
 下音を一手信よす方々  
 あらうとせしし人左の傍  
 牙ふあふ風もふくく為丹紅  
 雲をくくれてみるるさ鳥化

松風

松風

松風

松風

松風

松風の松風は口みきこむるごとし  
 日のあふよへのあふくをらすし  
 下音を一手信よす方々  
 あらうとせしし人左の傍  
 牙ふあふ風もふくく為丹紅  
 雲をくくれてみるるさ鳥化  
 松風の松風は口みきこむるごとし  
 日のあふよへのあふくをらすし  
 下音を一手信よす方々  
 あらうとせしし人左の傍  
 牙ふあふ風もふくく為丹紅  
 雲をくくれてみるるさ鳥化

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風







松凡 五  
松凡 五  
松凡 五  
松凡 五  
松凡 五  
松凡 五

野波 二  
野波 二  
野波 二  
野波 二  
野波 二  
野波 二

すきあからい草のつるのくけりあ  
次の小松をいへつゝいむきりあ  
物重いゝみりあれは改しなれ  
七つのいねやをいへつゝいむきりあ  
あのをあゝい内よ降しあし  
男たのいりささえりあ  
いあ  
いあ  
いあ  
いあ  
いあ  
いあ



撰者芭蕉門人

志古氏

野坡

小泉氏

孤屋

池田氏

利牛

元祿七歲次甲戌

六月廿八日



